

公共を支える哲学と文学

嶋田 博子

この夏、「21世紀の行政に向けた人文学 (Humanities) の貢献」と題する共同論文が国際学術誌に掲載された。哲学、神学、歴史学の執筆者たちから文学の章を担当しないかと誘われ、多彩な国籍6名の連名で提出したものだ。計量分析を伴う定番様式からは大きく逸脱していたが、査読者全員が好意的に評価してくれた。リベラルデモクラシーの揺らぎが目立つ中、効率性・有効性という基軸が席捲してきた行政学界でも、人そのものに目を向けるべきという認識が浸透してきたのかもしれない。

洋の東西を問わず、人文学は「食えない学問」

の代表格とされる。小説や思想書を乱読していた私も、専攻してよいのは稼ぐ必要がない富裕層だけだと割り切っていたので、法律を学び、官庁に就職した。30年余り人事政策に携わった後、縁あって公共を担う人材を育成する大学院に転じたが、予算編成や経済交渉といった華々しい実務経験がないのが引け目だった。だが、今回の論文執筆で、公務に当たる上で文学や哲学にどれほど助けられてきたかを再認識し、そうした素養の意義を伝える役目への自覚を新たにした。

公共哲学については、当初から授業科目に取り入れてきた。英国派遣時に、政治学の中でも哲学

を重視する課程で学んだ記憶を辿りつつ、正しさは一義的に決まらないこと、民主制と個人の尊厳は時に衝突することを踏まえ、政策当事者としてどう具体的判断を下すか問いかけている。

文学のほうはまだ手探りだが、小野正嗣早稲田大学教授の指摘、①他者への共感を可能にする、②世界について知る、③母語（感情の言語）の感度を高める、という3点で有効な（最良の）手段であるという「文学を学ぶことの意味」の伝達を試みている。

アンナ・カレーニナがよく引き合いに出されるように、優れた小説家が描く人物は時を超えて実在の人間以上に生きた存在となり、感情移入を誘う。哲学者のリチャード・ローティは、アンクル・トムが奴隷解放に果たした例を挙げつつ、普遍的道徳を論ずるよりも残酷さを嫌う心情に訴えるほうが支援につながるとする。倫理学者マーサ・ヌスバウムも、経済功利主義モデル一辺倒となっている政策現場を憂い、ディケンズの小説を題材に「心の賢さ」を求める。裁判官の卯たちに向けて、事実を見落とさず公正な判断を下すためにこそ人の生活や痛みへの想像力が不可欠だと語りかける。

世界との邂逅に関しては、地方で育った小学生の私の場合、まだ見ぬ東京よりもロンドンや湖水地方、ストックホルムやベルリンのことをはるかに詳しく知っていた。わくわくしながら頁をめくった幼い日の記憶と、舞台となった街への親近感とは切り離せない。屈託とは無縁の紙上での初対面が、仕事で訪れた各国に溶け込み、親しい友人を得る導き手となった。

言葉の感度といえば、文学者として高名な官僚は少なくない。森鷗外は陸軍省で軍医トップを極め、ゲーテもワイマール公国の高級官僚だった。不条理をリアルに描いたカフカは能吏だったという。価値観が異なる人々の納得を得るのも公共的責務の中核である。人は論理やデータだけでは説得できない。とりわけ分断を煽る粗野な言説が政治で多用される時代に、言葉が喚起する感情に敏感であることは、細かい法令への精通以上に大事なのだ。

ゼミに集う学生からは、若い哲学者の主張やアフリカ文学を教えてもらうこともある。人と言葉についてともに考え抜いた経験が、これから困難な公共政策を担っていく彼らの支えとなることを願っている。

京都大学教授